



折り方を教えながら、子どもと折り紙で遊ぶメンバー

病院に入院している子どもたちにとって、面会時間が終わり、お父さんやお母さんと離れるのは寂しいもの。泣き出すもいれば、就寝時間まで騒がしくなってしまう子もいる。山梨大医学部と教育人間科学部の学生でつくる小児ボランティアサークル「サニースマイル」のメンバーは、中央市の山梨大付属病院の小児病棟に入院中の子どもたちがそんな寂しい思いをしないよう、週に3回遊び相手となり子どもの入院生活をサポートしている。



# 小児の入院生活サポート

山梨大サークル「サニースマイル」

ある活動日。面会終了の午後7時になると、3人の学生が病棟内のプレイルームへ向かった。「お待ちかねだよ」と看護師さんが笑う。面会に来ていた母親たちは子どもを学生に託し、安心して病棟を後にする。子どもたちは早速「お絵描きする！」とせがんでくる。

## 異変にもしっかり対応

中には、何をしようか悩んでいる子どももいる。そんな子には、学生の方から「折り紙しようか」などと優しく声を掛ける。すると、子どもたちはうれしそうに学生と遊び始めた。一方、本を何冊も抱えて、ベッドを離れられない子どもの元に行く学生もいた。ベッド脇に寄り添い、子どもと一緒に本を眺める光景は、何ともほほ笑ましい。

子どもに寄り添い、絵本を読み聞かせる学生



子どもがトイレに行きたがったり、飲み物を欲しがったり、点滴が終わったりした時はナースコールで看護師を呼ぶ。子どもたちが安全に遊べるよう、学生たちはちょっとした異変にもしっかり反応し、責任感を持って臨んでいる。

この活動を始めて1年2カ月。子どもたちは毎回、学生が来るのを楽しみにしていて、就寝の9時が近づくと「今日は時間がたつの早いな」と名残惜しそうにする様子も見られるという。山口穂子さん（医学科4年）は「普通、午後7～9時という家で家族と話したりしている時間。その時間帯に病院にいなければならない子どもたちと一緒に過ごせることは、自分たちにとっても楽しい」と笑顔で話す。

## 感謝の言葉が励みに

医師や看護師からも「いつもありがとう」「ご苦労さま」と声を掛けられ、自分たちの活動が役立っていることも実感しているという。しかし現在に至るまでには苦労もあった。病棟で活動するには、感染症予防講座の受講や手洗い実習への参加、抗体検査などの条件をクリアしなければならない。病棟内での活動とあって、大学側に認めてもらうための説明やあいさつ回りにも時間を費やし、構想を立ててから活動開始まで1年もかかった。

活動を始めてからも、病棟に入ることができる条件をクリアした学生が3、4人しかおらず、週3回はできない状態。週1回からのスタートだっ



ベッドから離れられない子どもにも、本を読んでもあげる。いずれも中央・山梨大付属病院

た。それでも「子どもたちに少しでも楽しい時間をつくってあげたい」との思いで活動を続けてきたメンバー。今では約30人のメンバーのうち、およそ20人が病棟での活動許可を受け、サークル活動も軌道に乗ってきたという。

昨年7月からは月に1回、親の面会中に待っていただけないといけないきょうだいを一時預かり、一緒に遊んだりする「きょうだいサポート」も始め、子どものための活動にますます力を入れている。いずれの活動についても、山口さんは「需要はあるはず。いろいろな意見を聞き、病院側と連携を取りながら、これからも活動していきたい」と話している。

## 折り紙、お絵描き… 就寝まで遊び相手に